



写真 S-001 日本一の育てられたスギ ^{すぎ} ^{おおすぎ} 杉の大杉

八幡神社境内に立ち、二本の大杉が並立するもので、南幹が「日本一の育てられたスギ」である。北幹も幹周 10m 程の大杉であるが、南幹が大き過ぎて小さく見える。巨木 DB では両者一体とみなし、幹周 25.6m の日本一の大杉としている。これは、無理がある。歌手の美空ひばりゆかりの地として知られ、近くに記念碑があり、観光客も多い。



育てられたスギの日本一は高知県の「杉の大杉」である。幹周が15.6m。巨大な生命体で、1954年の台風でその大枝が折れ、それを運搬するのにトラック7台分あったというから驚きだ。

地上6~7mで三分岐し、それぞれの幹は根元に向かって板状に張り出している。参道より見える正面の幹は6mで二分岐し、一方は切断。その左の幹は7mで三分岐、背後の幹は正面の幹と上部で連理し、窓が明る不思議な構造。主幹には多くの枝の痕跡があり、こぶ状になって残っている。

天然杉の根元三分岐幹が巨大化し、お互いに融合した樹形と考えられる。同様の樹形は、京都府の「台杉」の項で記載した「谷守杉」である。よって、北株と南株とは、幹周にかなりの違いはあるが、同時期に植えられたと推測できる。

◀杉の大杉全景。(右・北株 左・南株)1976年撮影。

写真 S-002 日本一の親杉 ^{いとしろ}石徹白の大杉

この地は、標高千m付近の、白山禅定道沿いで、山岳信仰と深い関わりのある地。麓の石徹白・白山中居神社の神域で、親杉として育てられたと推察される。日当りを良くするため周辺は刈取られ、その効果によって、主幹から伸びる立条幹が枯れずに発達し、次々と幹に成長して巨大化した。



▲石徹白の大杉全景

主幹の多くは白骨化しているが、巨大化した伏条幹が健在である。主幹脇から伸びる細い伏条幹も数多く見られ、伏条幹から朽ちた主幹に沿って根が伸び、やがて古株更新の樹形になっていくだろう。完成すれば、縄文杉を凌ぐ大杉になるかもしれない。天然杉の生命力を今だに供えた希有な大杉なのである。

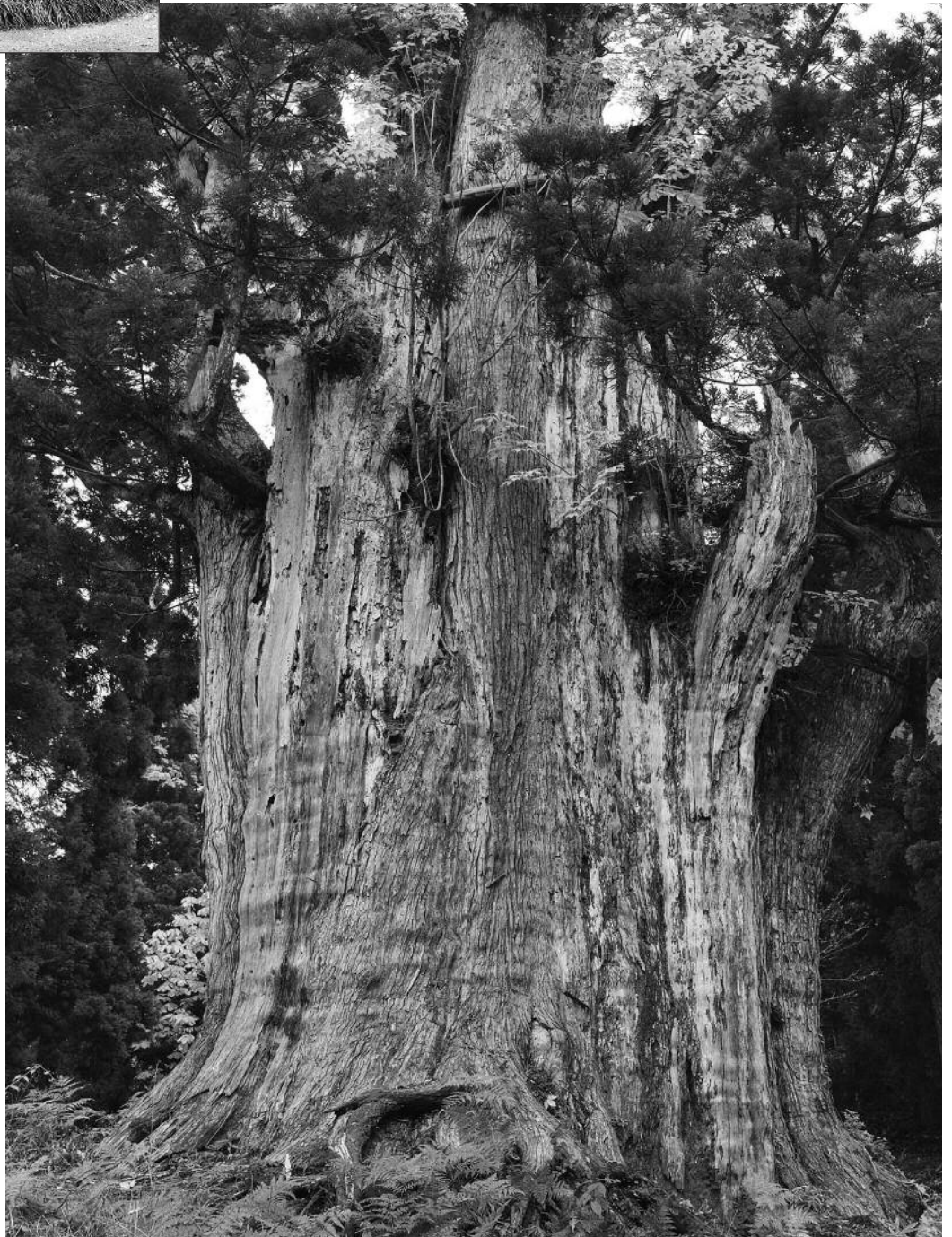


写真 S-003 きよすみ 清澄の大杉

清澄寺の境内に堂々と立つ見事な一本杉。もともと並んで小杉があったが倒れ、その時に上部が破損した。

下は二本並んでいた頃の写真。左が小杉。小杉の切株等は、資料館に保管されている。

(写真・鴨川市教育委員会)



写真 S-004 つきぜ 月瀬の大杉

1844年に焼失した江戸城本丸の再建用に供出要請があったが、何とか守り通した。明治時代には売却の難を、村人達が無人講を作り、長年にわたって積み立てて大杉を救う費用を作ったという。難関突破のシンボリック的存在である。



写真 S-006 ^{かしも}加子母のスギ

大杉地藏尊のご神体として祀られている。樹皮は長寿や安産のお守りとされる。源頼朝伝説が伝えられている。堂々たる見事な単幹樹で、その巨大で安定感が信仰される所以だろう。



写真 S-005 ^{やむらすぎ}八村杉

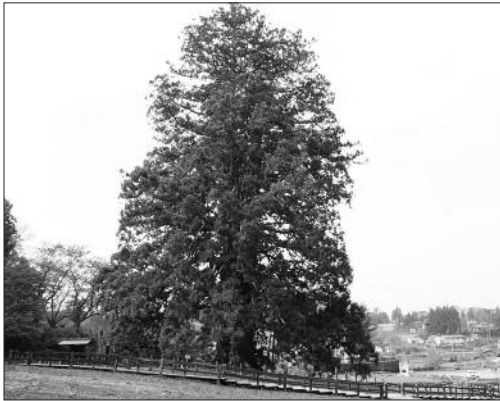
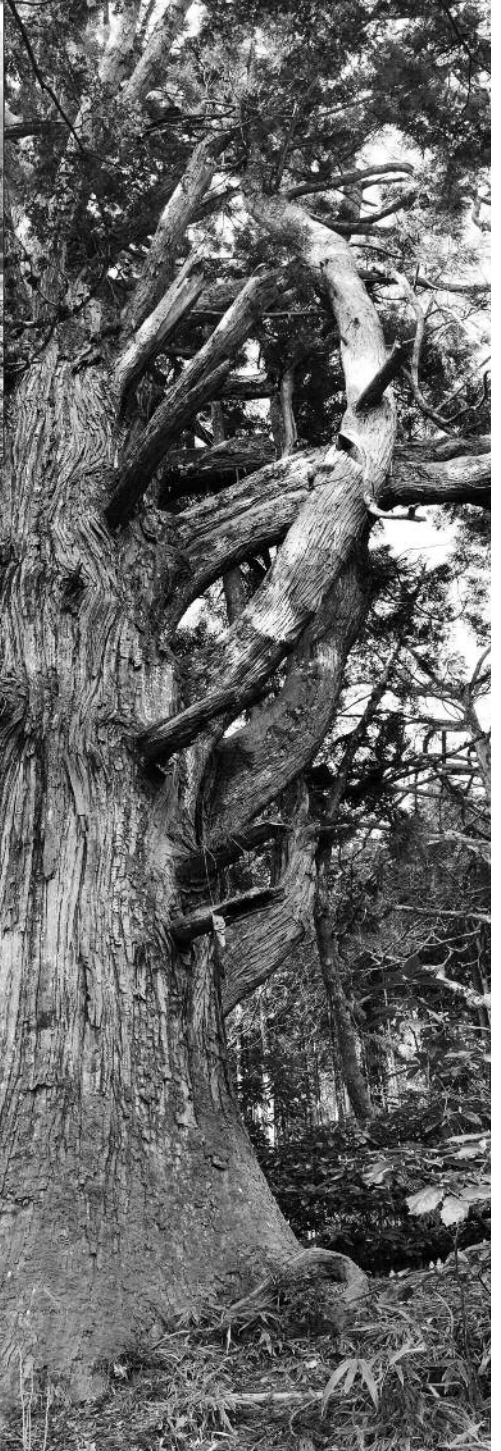
十根川神社の御神木で、20m 付近で分岐するまで完全な一本杉として直立する。これ程、真直ぐで巨大な一本杉は見事。真直ぐに伸びる屋久杉を見るようで、ルーツはその辺にあるのかもしれない。





すぎさわ
写真 S-007 杉沢の大杉

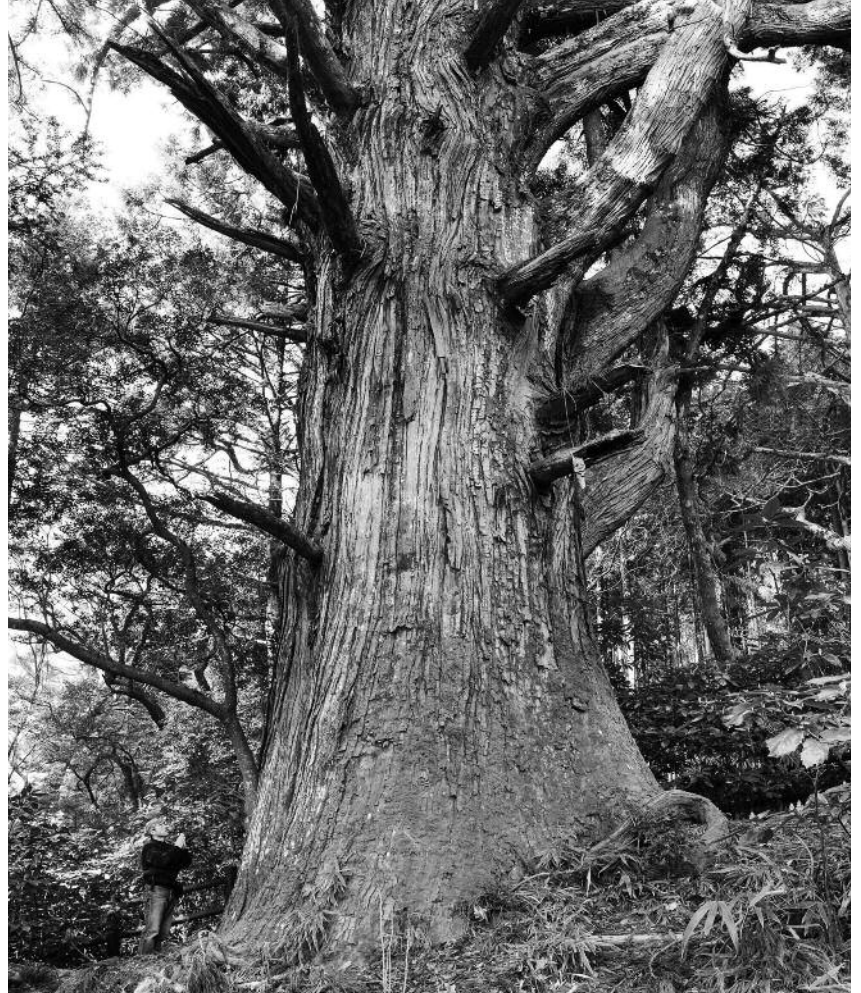
遠目には素晴らしい一本杉に見えるが(右下写真)、実際は地上8m付近で数本に分岐している。天然杉の先端破損による自然分岐が巨大化したもの。広大な敷地に立ち、落雷や風雪によく耐えた奇跡の大木だ。

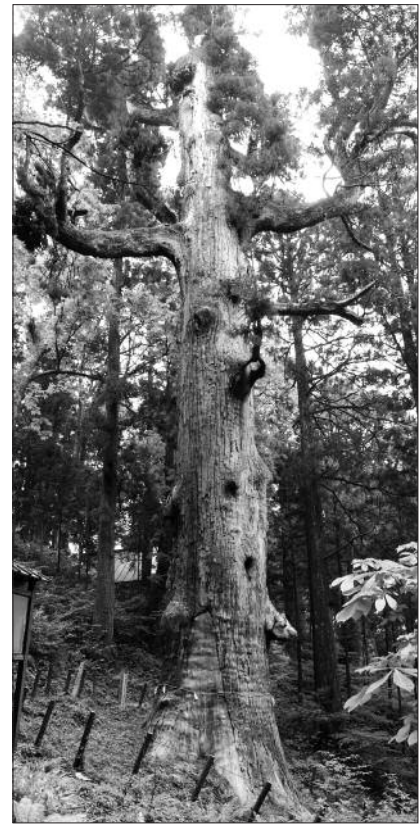
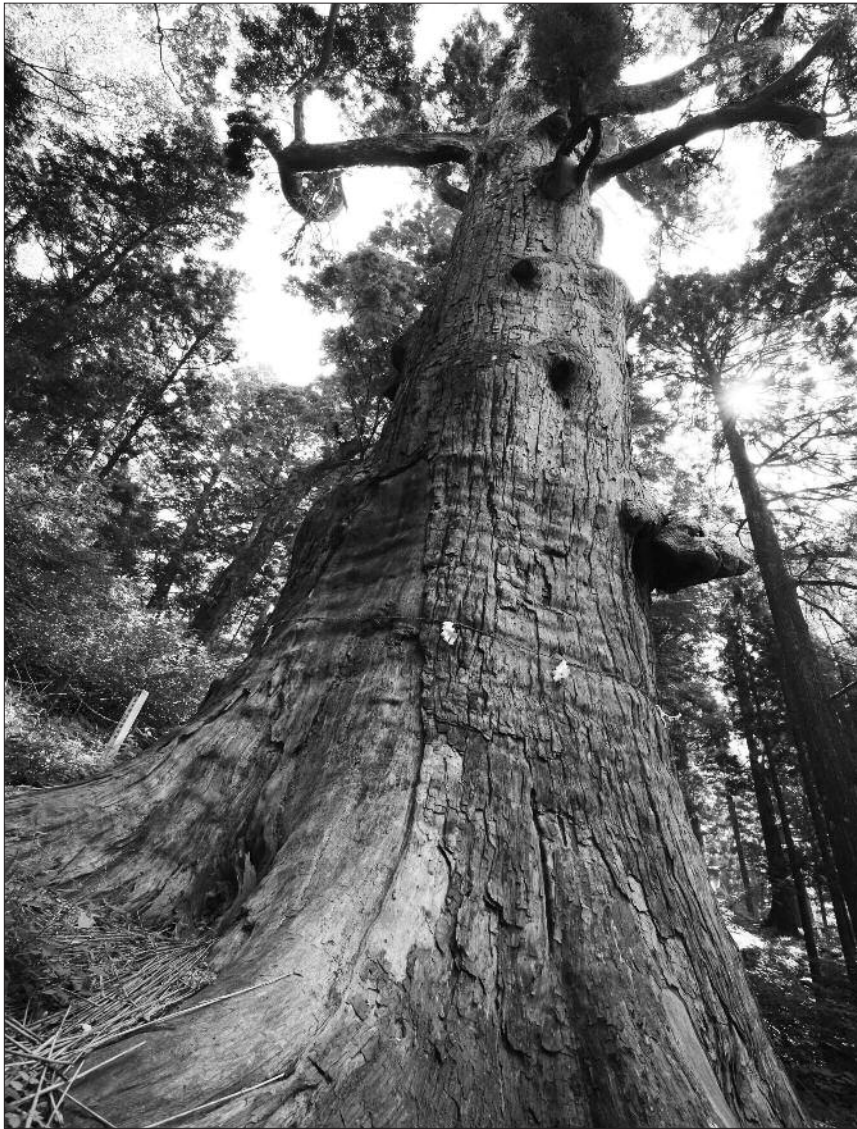


杉沢の大杉全景

ひがしいや ほこすぎ
写真 S-008 東祖谷の鉾杉

鉾神社の背後に立つ。この社は屋島の合戦で敗れた平家の平国盛がこの地に逃れてきて、平家の守り神である鉾を祀った事に始まる。鉾杉は国盛が植えたと言われ、「国盛杉」とも呼ばれている見事な一本杉で、この地方の植林の親杉である。



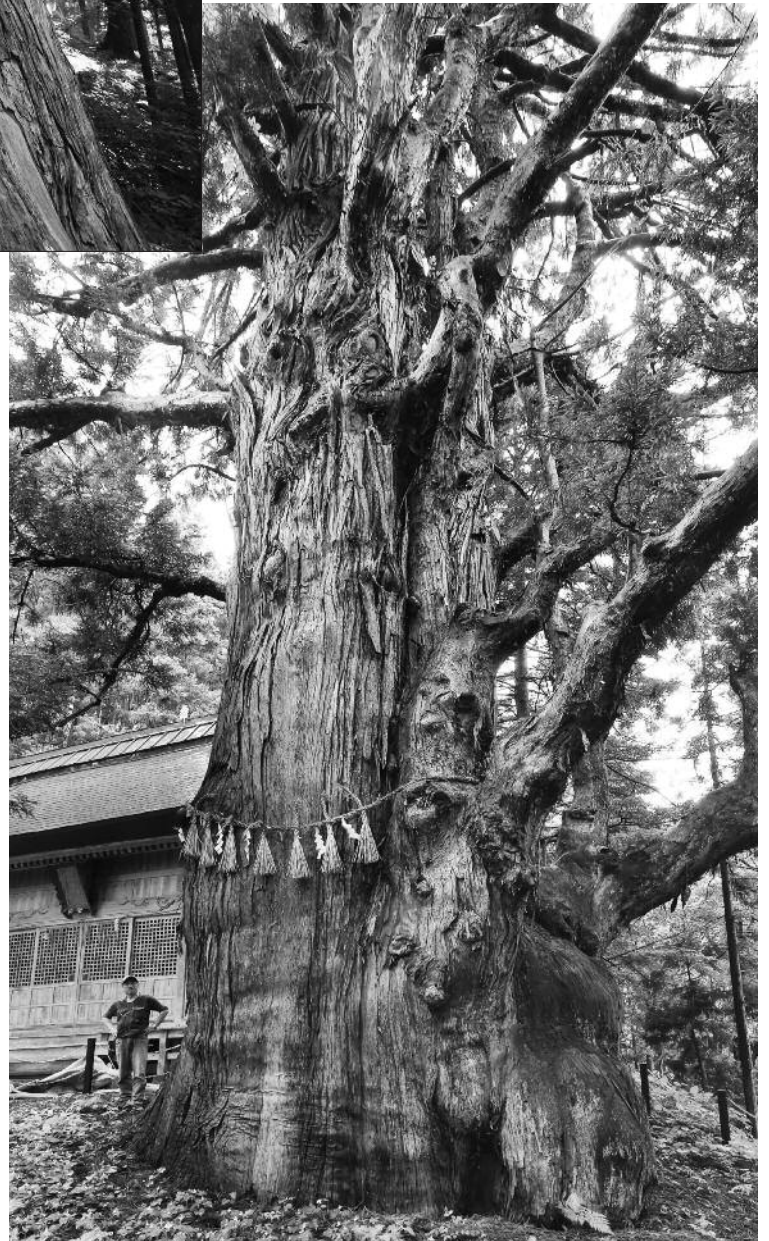


べんけいすぎ
写真 S-009 大船神社の弁慶杉

大船山山頂近くに建つ大船神社の裏、遊歩道沿いの斜面に立つ。半枯状態であるが、存在感は大きい。神社周辺にある見事な一本杉の親杉である。

急斜面に根張りを巨大化させ、安定感がある樹形であるが、これまでの測定方法の、山側 1.3m 地点の幹周を測定するのは至難で、これでは実感される大きさよりかなり小さい数字が出る。

M 式では、上部接地面付近から測定し、実感される大きさが測定された。



くさぎの
写真 S-010 日下野のスギ

大内山神社の御神木。完成された一本杉(左幹)と荒々しい天然杉(右幹)が根元近くで融合して立上がる。これは大変珍しいものである。どのような思惑でもって、このようなスギに仕立て上げたのであろうか。民族文化遺産として貴重な存在である。



◀写真 S-011

はるのすぎ
春野杉

春筵山山頂に近い標高800mに大光寺があり、境内の端の斜面に立つ。大光寺開山期に、植林苗の親杉として育てられたもので、山岳宗教との関わりを示す貴重な文化遺産である。見事な単幹樹で、巨大な大枝は、日当りの良い環境で枯れずに成長し、優良品種の種子生産に貢献した事を物語っている。

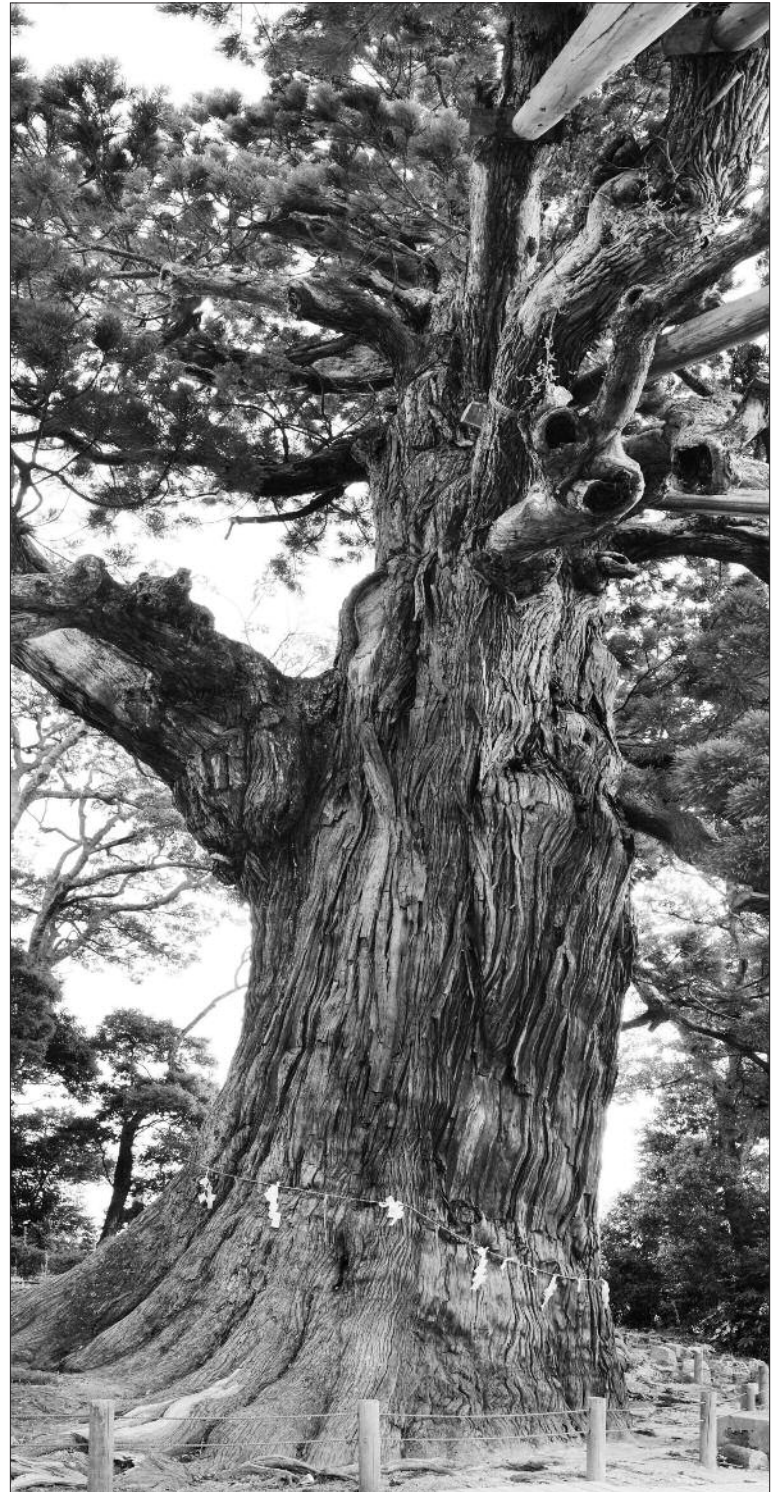


写真 S-012▶

たまわかすのみことじんじや やおすぎ
玉若酢命神社の八百杉

島根県最大の大杉は隠岐の島にある。島の植林親杉として大切に保護されてきた。若狭から参詣に来た八百比丘尼が植えたという伝説がある。(右上・全景)



やまいらがわ たますぎ
写真 S-013 山五十川の玉杉

熊野神社の御神木である。驚く事に、雪国にも関わらず、枝が太く水平に長く伸びている事。そのため、遠目に樹形が玉になって見える。(下写真)

雪国では、枝は極力短く、しかも垂れるような品種改良が進んだ。玉杉は真逆のスギ。存在理由を推測する事はできないが、ここまで育て上げるには、地元の人々の長年にわたる努力があった事は疑う余地はないだろう。



ほうきすぎ
写真 S-014 中川の箒杉

かつて上部の斜面には巨木が林立していたが、残念ながら箒杉一本残して伐採された。地上3mの大枝も折れてしまった。それでも、まだまだ立派な一本杉だ。1972年の丹沢集中豪雨の時、上部の土砂崩れをここでくい止めたという。集落を守り、睨みをきかせるご神木だ。

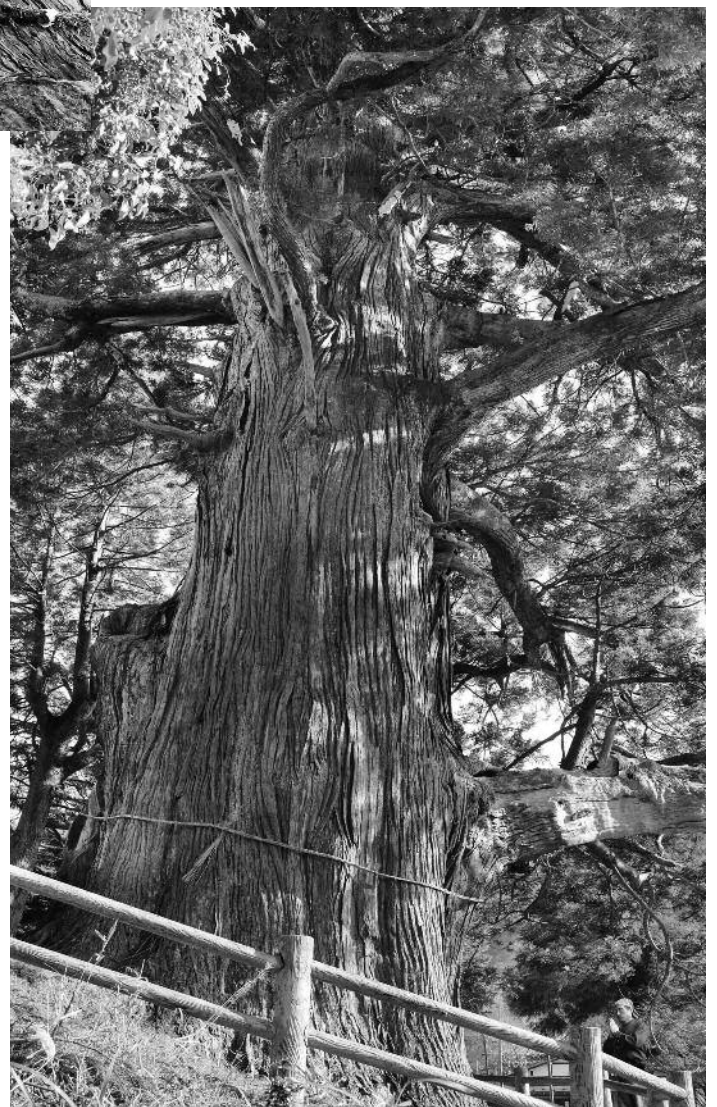


写真 S-015 ^{さかさすぎ} 逆杉

幹周 M11.2m(男木) M8.15m(女木)

並立する巨杉で、かつては大枝が見事に垂れ、逆さに生えるような景観を呈していた。大杉による門杉は各地に見られるが、根元が融合する程に接近して植えられた大杉は、あまり例がない。

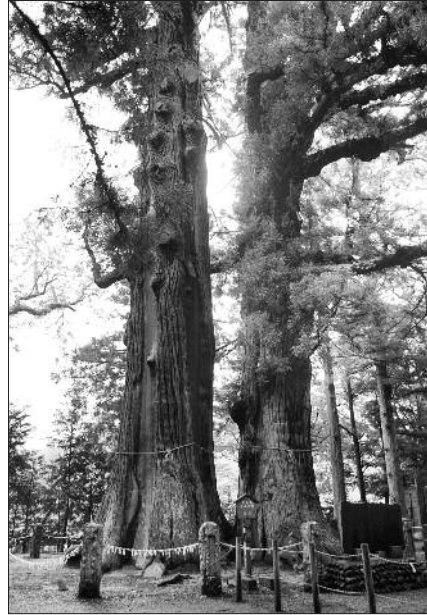


写真 S-016 ^{ゆしま} 湯島の大杉

崖下に大きく根張りが伸びる樹形で、これまでの測定方法である山側から 1.3m 地点を測定する事は困難で、幹周もかなり小さくなる。M 式では上部 0.3m 地点を測定する事によって、実感される大きさの数字が出た。周辺には見事な一本杉の林があり、大杉はこの地方の親杉である。(右写真は境内下部からのもの)
(下写真・境内上部よりの樹形)

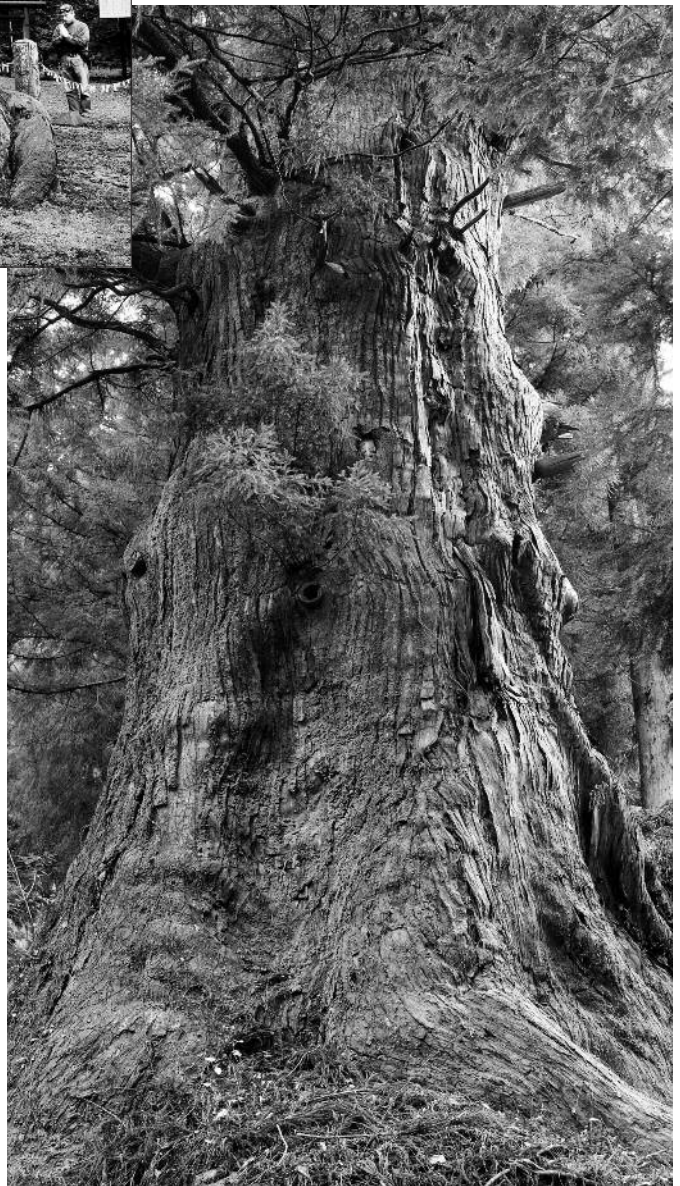


写真 S-019

いわや 岩屋の大杉

根元で3分岐する育てられた天然杉の怪樹。根元の空洞には白蛇が棲むという。神が宿るもうなづける程、おどろおどろしい樹形をしている。

実生伏条幹が巨大化した樹形で、急斜面に生育したため、伏条幹が垂れ、より奇怪な樹形になった。

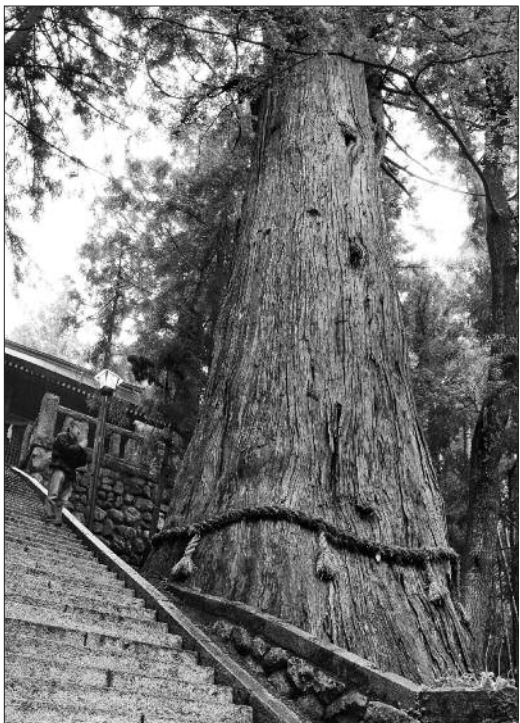


写真 S-017

ほそのすわじんじや 細野諏訪神社の大杉

1177年(治承元年)に、地元の八田弥五衛が神社に献木したと伝えられている。すなわち、この地方の植林の親杉として導入されたもので、優良選抜による見事な一本杉である。20m付近まで全く枝がなく、親杉としての役割を十二分に発揮したであろう。(右全景)

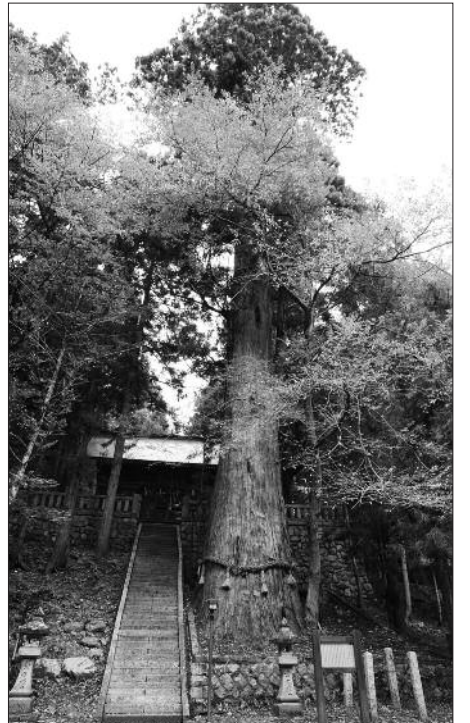




写真 S-020

しょうぐんすぎ
将軍杉

地上2mで6分岐で、主幹は1961年の第二室戸台風で破損する。このような樹形の場合、M式では主幹の最もくびれ部分測定する。よって幹周 M13.5m(分岐 1.0m 2013)

地元では日本一の大杉。その根拠は、巨木DBの幹周 19.31m。これは地上 1.3m 地点を凹凸に沿って測定した数字。

「将軍」とは、平安末期の武将平繼茂たいらのこれもちの事。

主幹が破損しているが、根元近くから伸びた伏条枝が枯れずに幹に成長し、巨大化した樹形。

同じ分岐樹形であっても、前頁「岩屋の大杉」は、根元で分岐した伏条幹が巨大化したもので、もともとすべて幹であった。



写真 S-018

くつめおとすぎ
久津八幡宮の夫婦杉(雄杉)

久津八幡宮境内に雄杉、雌杉と呼ばれる二本の大杉がある。二本とも昭和初期に襲った有名な室戸台風によって上部が折れ、樹形が小さくなってしまった。それでも、幹周は堂々とした存在感を呈している。

(右写真・右が雄杉、左が雌杉)

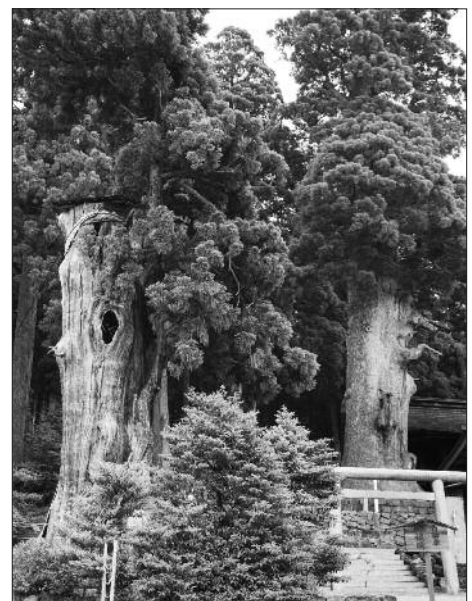


写真 S-021

日本一の分岐杉

たかい せんぼんすぎ 高井の千本杉

15本の根元分岐幹からなる樹形で、分岐スギでは日本一。

地元記述では、根元の小さな池の廻りに複数のスギを植えたものとされる。

実際は、京都府の台杉群生地で見られる、実生伏条の分岐幹苗木を見いだして育てたもの。日当たりの良い環境で、幹が枯れずによく育てられている。

融合木では、必ず融合の痕跡が残るが、本樹にはその痕跡が全く見られず、一本のスギである。

巨木DBでは、幹周25mとされているが、これは分岐幹の合計周と思われるが、実際に全ての分岐幹の測定は困難で、数字の出所が判然としない。

M式では、元々の幹は根元のくびれた部分と判断し、地上0.3m地点を測定した。表記は株周となるが、巨大感を群を抜いているので評価はAランクとした。

台杉群生地に見られる多数の分岐幹苗木が、本樹のルーツではないかと想像される。遺伝子解明を期待したい。



写真 S-022 おおごしや 大杵社の大杉

地上4~5mで4分岐。天然杉を自然に任せて育成したもの。主幹は見事な一本杉に成長している。コブが多いのも特徴だ。二度の火災に遭遇したが、これが原因で腐食がくい止められ、再び樹勢が戻ったという。